

明治の丸善

——「丸善の横顔——疊敷き時代の回顧」より抜粋

田 中 二 郎 述

以下は小社のはるか昔の従業員であった田中二郎（一八八八入社（退職時不明）の追憶談（『丸善百年史 上巻』二四二ページ）あるいは「丸善の横顔」なる小冊子（『同書 下巻』八六九ページ）からの抜粋で、『丸善百年史』とかなり重複しているが、明治の小社の様子が興味深く描かれているので掲載することにした。小誌編集室は「丸善の横顔」の全文コピーを入手したが、これが口述筆記によるものか本人が執筆したものか確かめられなかったことをお断りしておく。本コピー末尾には「一九三九・九・一」と日付が記されている。なお、原文の旧仮名遣いを現代表記に改めた。また、本文中のわかりにくいと思われる個所に小誌編集室が捕捉を（注）として付記した。

丸善へ入社 私丸善に入ったのは憲法発布の前の年、明治二年（七月一九日）のことでした。丸善は二階建の八間間口の店で、二階が洋書、下が和書・文房具で別に唐物店（注 洋品店）が附属していました。

洋書を売る店だからどんなに時代の尖端を行ってハイカラ

だろうと思われませんが、店の品物は誠にハイカラであっても、店の気風は蜜カラ、どちらかといえば保守的でした。ここが所謂マルゼニズムとでもいうところでしょう。下はもちろん二階の洋書売り場も疊敷で、店員の服装も世間と同様縞の木綿の着物で、前かけをつけていたのです。小僧が注文の本の仕入や、配達品を届けに出るには丸善商社と襟に文字を白く抜き、背に①の印をつけた印半纏を着、千草の股引に饅頭笠、草鞋履きといった姿をしていました。つまりハイカラな商品売の店であっても構えや店員の服装は当時としては他の商店と同様の当たり前の格好であった訳です。もともと看板は N. P. MARUYA & Co. と横文字書きで、私がやど入りでたまたま親許に行った時、前から顔を知っていた肴屋に「おたなの看板は英學で書いてありますね」といわれた様にローマ字書きでした。

印半纏ですが今の人が考えると変に思うでしょうが昔はこの印半纏がいわば商家のユニホームで、どの店でも必ず店費で作り、全店員に給与したものでした。洋服など普段決して着ませんから少し立働きのときは必ずこの半纏を着るの

で、丁度今洋服の上衣を脱いでチョッキやシャツ一つになつて働くのと同様な訳でした。

洋書係 私是最初から洋書の係となりましたが、その時(明治二年七月)書籍部の総員はわずかに一八名、内三名が洋書係で、唐物店、工作部及び菱屋(後の丸善洋品小売部)を加えても店の人数は四〇名内外でした。洋書係といつても仕入から販売の全部に携るのが私を入れてたつた三人でしたからその規模は大体想像ができません。売場にあつた政治の書物は何れも之等(注 国会の開設)に關係したもので、各国の憲法、憲法史、議會、議場の整理、議長の心得、選挙の心得、自由論、代議制理論、国家論などの本が並んでいました。

英語の知識 英語の A・B・C の知識も知らなくて入つたのですからその知識もここで授かつたのです。毎晩七時から八時まで一時間各係の小僧が十人ばかりと番頭が十人程先生について英語を教わつたのです。

店の構え ここで少し当時の店の構えをお話すると現今の様な開放的なものとは異なり、階下の売場は中央が土間で左右が畳敷となつていて、冬は火鉢、暖かくなると大きな煙草盆を出して店員はその傍に座つて客に接したものです。それでお客の注文をきいてからはじめて入用の書物を後の棚や庫から出すので、現今の様に漫然と何か面白い本はないかと足を運び、自分勝手に書物を選ぶのは難しく、大部分は欲しい本を名指しで買いにくるという状態でした。この階下の土間

のつき当りが階段となつて、二階、つまり洋書の売場に通じていましたが、ここは三方に本の棚が並び、中央には長さ二間に幅一間程のテーブルがあつて、本が置いてありました。今の様に農業、建築、法律等の分類にはなつていましたが各其一部門は畳半畳程で、本の数も少ないのでした。しかもこの二階は土蔵造りで天井が低く、採光が悪くて暗く、実に不便でした。こんな訳で店全体としての構えは特に目立つといつたものではありませんが、これは昔から日本では大きな商人程店構えを出来るだけ小さくみせ、内部に入ると品物が豊富にある、つまり「良買は深く蔵す」という風を尊ぶこと——それを丸善も守つていたので後に外国人に「日本の商人は表の構えだけでは判らない」といわせたものです。

西洋人と珍談 洋書を買いに西洋人がよく店に来たのですが、靴を脱ぐ習慣を知りませんから、黙つているとそのまま土足で上がりこむのです。それで店員は西洋人が来ると Please take off your shoes とよく足を指したものです。このとき、新米で会話がろくろくできない店員がぶつつかつた場合、そらとばかり手帳に書いて置いた文句を知ろうとして帳面を開きながら「プリーズ テーキ オフ」と言いかけてますが、何分怪しい発音で通ずるはずがなく、そのまま構わず靴で上られるので、手帳を片手に「プリーズ プリーズ」と後を追つたものです。

洋書の仕入 本の仕入は外国から来る目録、広告刷や雑誌の批評やら客の話、また出版社の通知やらを総合して取り

寄せたのですが、その道に入ると一を聞いて十を知るのが商売人の常ですから、器用な選択注文ができたものです。名指して書物を買いに来た客に生憎なくて断ると「こんないい本を何故置かないのだ」といつて帰られる。それを記憶していつて目録を調べ、納得が行くと注文を出すこともありました。

和洋書籍及文具時価月報 新著の書物や出版書を御客様に知らせるために明治一五年頃から「和洋書籍及文具時価月報」という菊判より少し大型で、二〇頁程の冊子が毎月発行されておりましたが、これは今のアナウンスマントの前身であり、また學鐙の前身でもありました。毎月船載する新刊及び重版の書名を載せて、お得意に無料で送っていたもので、日本人と共に外国人のお客も多く、三百部程が毎月外人向けになっていました。

この時分外国人一般に共通していたのは当時他の商店が始んどそうであったでしょう、決して初めの間は言い値では買おうとしないのでした。必ず値段をきいてはまけると言うのです。もつとも相当高い値をかけていた店もあつた様で、丸善は堅い店だからと断るのが随分と骨でした。前にお話した「靴をぬいで下さい」の「プリーズ テーキ オフ …」と同様に店員の手帳にはその返事が We sell at one price only あるいは We never overcharge と言ふことであつた。「お早う」「さようなら」といつた言葉と同じ程始終くりかえしたものでした。

店員の生活 当時の店員の生活を少し述べてみましょう。

営業時間は朝の八時から夜の十時までで、休日というのが小僧は一年に四日で、元日、一月十六日、それに十一月三日の天長節で、このうち元日と天長節は店を閉めて全体に休んだのでした。一寸考えるとこの営業時間の長いのが苦痛の様に思われますが、昔はこの店でも家族制度であつたため小僧も番頭も一緒に店に寝とまりしていつて、その間に色々融通がきく風習でした。只今の様に出勤簿があつてきちんとしていつてのと違つて、正月とか町内のお祭りとか、戦勝のお祝いなどの時には早くから店を閉じて、内ではお酒が出て、みないい機嫌になつていつたりしたものです。それで、どうかした拍子に西洋人などが知らないで入つてくると、頭に鉢巻をした酔払つた番頭などが「ハラデイ、ハラデイ（休日 Holiday の意）」と言つて手を左右に振つて断りました。

またお正月など郵便配達の人があると、飲んでいつる者が「まあ一杯」と盆を出します。最初は辞退するが、「まあまあ」と勧めると少し飲み色々世間話もする。その内に黒皮の鞆に郵便御用と赤字で大きく書いてある郵便物入れの中に蜜柑を一杯つめてもたして上げる、といつた風で時代ものんびりとしていつたものです。こんなことは今から考えると誠にダラシがないことの様ですが、当時は日本橋区の大店向では氏神様の祭礼とか、恵比須講などの時は店を早じまいして赤い毛氈を敷きつめて金屏風を立て、主人はじめ番頭がうち揃つて賑やかな一時をすごしたものです。私達も暮になると毎年のしもちを二枚宛貰つたものです。おもちのついでに一寸元

旦の気分を述べてみますと、元日は暗い内からついで先の茶所山本山で吉例のテケテンテケテンと賑やかなお囃子が始まる。これを床の内でも聞きながら夜の明けのを待つて横町の山田湯へ朝湯と洒落こみ、それからいよいよお雑煮を祝うという段取になるのです。

仕切状と略語

本屋同士の注文が相当にあった訳ですが、当時仕切状に略語を使ったのは丸善が最初です。丸善は保守的な所も今迄申した様に色々あるのですが、取引方法は非常に進んでいて、総てイギリスのビジネス・メソッドをそっくり採り、書類でも何でもハイカラでしたが、外国の本屋からのインボイスに o/p (out of print の略)、n/o (not out の略) といった略語のあるのを日本流にして

切〓品切。絶〓絶版にて入手不可能。再〓再版中。次〓次便で送る。未〓未出版。

等の略語を作り、これを仕切状風の罫紙の片隅に「略語の解」として印刷しました。一切の注文はその略語で取引しまして、長たらしい文句の省略が出来、能率も自然上るといって訳でした。

非常に売れた「種の起源」

明治三四年の末に金澤井吉

さん(当時の丸善社長金澤末吉氏の兄)が内田魯庵さんを主として十九世紀の名著は何かという、今でいう「ハガキ回答」(此時は封書で丁寧なもの)を各名士大家に郵送して答えを乞いました。そして翌三五年の學鑑一月号にその回答を掲げ大いに誌上を賑わしましたが、その結果はダーウインの

「種の起源」が第一位になりました。ところでこの本は John Murray の版で一冊六志(注 シリンク)でしたが、六志といえは三円になり、当時の三円では仲々買うのに骨が折れます。その時金澤井吉さんはこの本は非常に売れると思うし、また飯に一時に売れなくとも決して腐るものではなし、またこんな良書は安くして広く頒布したいと色々考えた後、出版元へ「紙が悪くてもいいから紙型があるなら安く刷ってくれ」という掛合をしました。その結果、遂に一志で契約が出来、予期通り仮綴で安く売ることができ、かつそれが學鑑の記事で刺激をうけ評判であっただけ莫大な数が売れました。一冊六〇銭で売ったと思いますが一回に天井につかえる程着荷しますが、二三ヶ月で売切れ、売り切れとなって行きました。

エンサイクロペディア・ブリタニカ 大英百科全書

(Encyclopedia Britannica) は第九版の時のことを覚えていますが、これは二六冊もので、日本では主に米国のマックスウエル ソンマービルという会社でリプリントしたのを売っていました。それは代価の点が英国版より米国版がずーっと安いので、丸善はこれを広く買い扱めたのでした。その後万国版權法(注 明治三二年「著作權法」公布により万国著作權同盟に加入)で米国の翻刻のものが日本では売れなくなりましたが、これより先丸善では米国版を沢山買いこんで安く読書界へ供給したのでした。(一九三九・九・一)